

# わがまちの景観を織りなす歴史

## ～古代ロマン編～



加茂遺跡から見た長尾山丘陵の古墳

令和 5 年 3 月

宝塚市長尾台小学校区まちづくり協議会

## 目 次

はじめに	・・・・・・・・・・	1
講演 1 「古墳時代の最明寺川流域」	・・・・・・・・・・	2
講演者：岡野慶隆先生		
講演 2 「長尾山丘陵における前方後円墳の調査」	・・・・・・	13
講演者：福永伸哉先生		
付録	・・・・・・・・・・	19
編集後記		

## はじめに

この冊子は令和4年11月6日（日）に当協議会が開催した歴史講演会の内容を記録したものです。令和3年に“このまちの景観を織りなす歴史”をテーマに歴史講演会を開催しました。今回はその続編として郷土史研究家の岡野慶隆先生、大阪大学の福永伸哉教授にご協力をいただき、この地に人々がくらしていた古墳時代についてご講演をいただきました。この地域の魅力をより多くの方々に知っていただくことが出来るように冊子化いたしましたので、ご一読ください。

我々は、日頃古墳時代について考えることはほとんどないですが、この講演を機に新しい発見ができることを願います。

併せて、この講演会と関連して「わがまちのお気に入りポイント」と題してスケッチ展とフォトコンテストを開催いたしました。スケッチ展に出品された作品とフォトコンテストの入選作品を巻末に掲載していますので是非、ご覧ください。

宝塚市長尾台小学校区まちづくり協議会  
(コミュニティひばり)

## 講演 1 「古墳時代の最明寺川流域」

講演者 岡野慶隆 郷土史研究家

このコミュニティひばり地域は、古墳が本当にたくさんあるということと、現在皆さんの生活圏が川西市南部の能勢口あたりと一体であるのと同じように、これらの古墳を築いた人々が住んでいた集落がこの山裾の川西市域にあったことが発掘でわかってきました。そういったお話をいたします。

### 1. 最明寺川流域の古墳と古墳時代集落

図 1 は、この地域の地図で、上のほうが長尾山丘陵です。この丘陵の西は中山寺の方まで繋がっていて、東の端がこの地域になります。

この地域の丘陵上には古墳がたくさんあります。長尾山古墳・万籟山（ばんらいさん）古墳・八州嶺（はっしゅうれい）古墳や、川西市になりますが勝福寺古墳など、全長 40～80 メートルの大きな前方後円墳があります。また、直径 10～20 メートル程度の小さな古墳ですが、群集墳と呼ばれて約 200 基も群在しています。雲雀丘古墳群・雲雀山古墳群・平井古墳群などです。それに対して山裾の平野部には加茂遺跡、

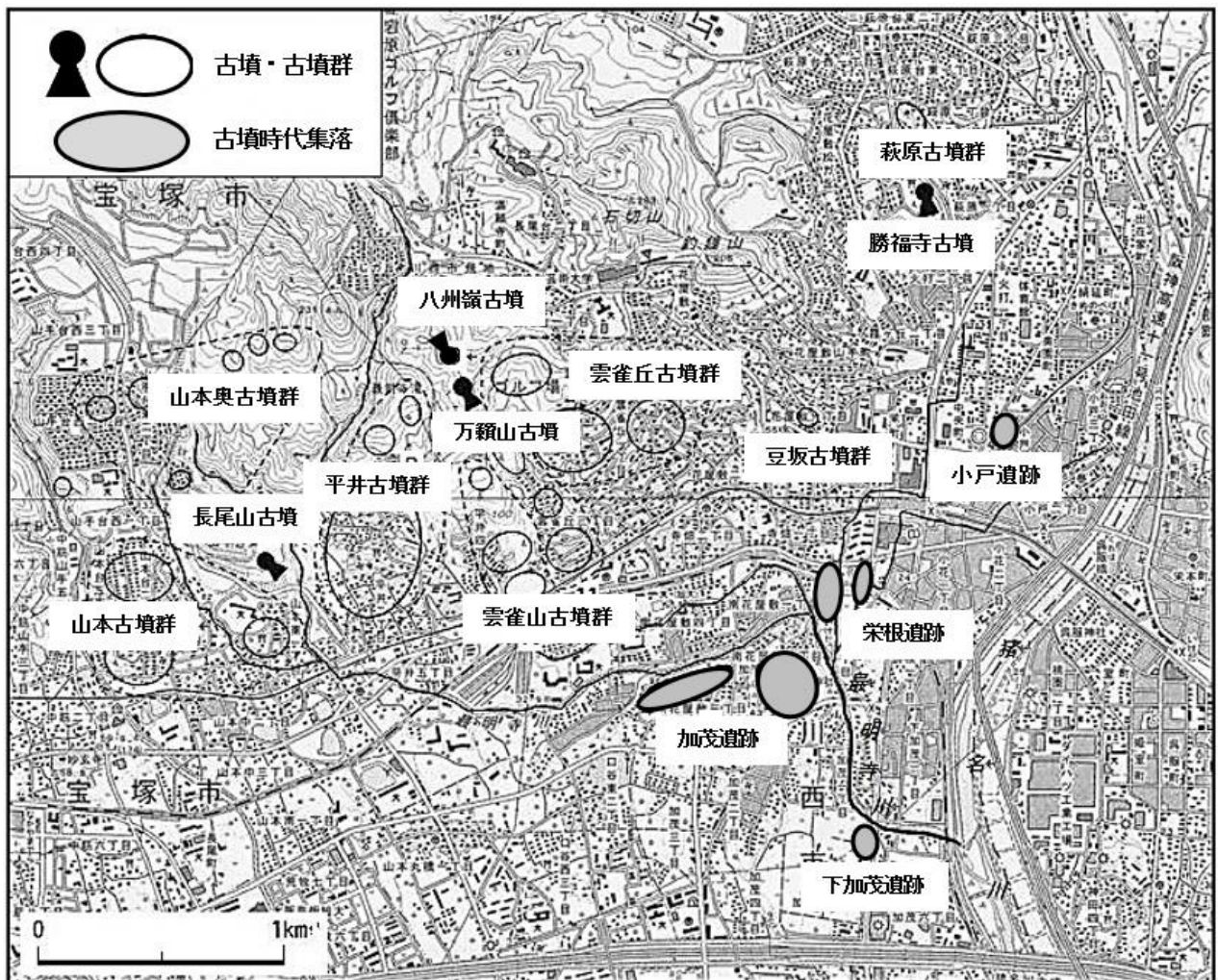


図 1 最明寺川流域の古墳と古墳時代集落



栄根（さかね）遺跡、小戸（おおべ）遺跡、下加茂（したかも）遺跡といった古墳時代の集落が営まれており、これらの集落の人々が山の上の古墳を造ったのではないかと考えられます。本日、私はこれらの集落を中心にお話をいたします。

年代を見てみます。先に弥生時代があって、西暦 300 年の少し前に古墳時代が始まります。700 年頃には奈良時代となりますが、弥生時代と奈良時代に挟まれた約 450 年間は古墳時代です。この地域の古墳を年代別に見ると、まず 4 世紀代の古墳時代前期に長尾山古墳・万籟山古墳・八州嶺古墳が築かれます。5 世紀代の古墳時代中期の古墳はなく、6 世紀の初めに古墳時代後期の勝福寺古墳が築かれます。数多く築かれる群集墳は、後期でも時期が下り 6 世紀の後半から 7 世紀にかけてのものです。その後が奈良時代になりますが、古墳が築かれることはなく、この地域では昨年お話しした栄根寺廃寺が建立されます。

集落は、加茂・栄根・小戸・下加茂の各遺跡が弥生時代から古墳時代へ続きます。ただし、弥生時代中期は加茂遺跡だけが特別に大きく、その他の 3 遺跡はごく小さな集落でした（図 2）。弥生時代後期になると加茂遺跡は縮小して、そのまま古墳時代へ継続します。一方、栄根・小戸・下加茂遺跡は、弥生時代後期に加茂遺跡が小さくなるのと反比例して、古墳時代にかけてある程度の規模の集落となります（図 3）。



図 2 弥生時代中期の集落分布

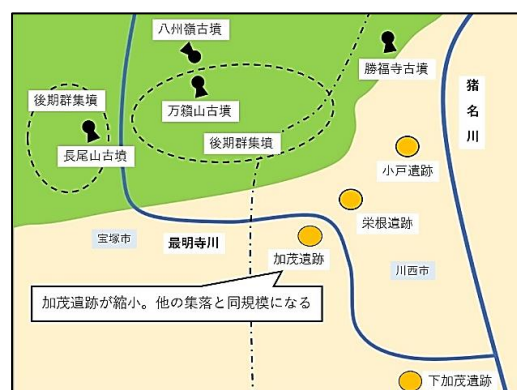


図 3 弥生時代後期～古墳時代の集落分布

## 2. 集落の変化

### ●弥生時代中期の加茂遺跡

弥生時代と古墳時代の集落がどのように異なるのか。集落の変化について、弥生時代中期に特別大きな集落であった加茂遺跡から見ていきます。図 4 は、川西市文化財資料館で展示しているジオラマです。加茂遺跡の最盛期にあたる弥生時代中期の様子を復元したもので、縮尺 1/500 の模型です。

この時代の加茂遺跡はとにかく規模が大きく、東西長約 800 メートル、南北長約 400 メートルで、面積は約 20 ヘクタールもの広さです。推定される人口も多く、約 500



図 4 弥生時代中期の加茂遺跡のジオラマ

人もの人々が住んでいたと考えられます。

発掘調査では集落の構造がわかってきています。大きい集落ですが、一カ所にまとまって住んでいるのではなく、東に中心となる大きな居住区があり、西に少し離れて別の居住区が二つあります。中心居住区の中心部にある大型建物は板塀で囲まれていて、村長（むらおさ）のような人が住んでいたと考えられます。西の方は墓地となっており、四角く溝で囲った方形周溝墓がたくさん見つかっています。

この集落の特徴は、防御された集落であることです。加茂遺跡は、伊丹台地の北東の端にあたるため、東と北は高さ約 20 メートルの崖になっています。崖は誰も登れないような険しい急斜面で、この崖の上に集落の中心地を置き、平坦地が続く中心地の西側と南側は何重もの環濠を巡らして中心地を守っています。東側の崖の一部には斜面環濠を設けて、防御を補強しています。さらに南側からも外堀で墓地と居住地をまとめて囲んでいて、まるで後の時代のお城のように固く守られていた集落です。当時は近隣集団との争いがあったためと推測されます。このように守られたところにおよそ 500 人もの人々がまとまって住んでいたというのが、加茂遺跡の弥生時代中期の集落です。

### ●古墳時代の加茂遺跡

ところが、弥生時代後期になると加茂遺跡は突然縮小して、周辺の栄根・小戸・下加茂遺跡と比べて特別大きな集落ではなくなってしまう。

そのあたりを加茂遺跡から見ていきます。図 5 は、弥生時代後期から古墳時代の加茂遺跡の集落の様子を示しています。弥生時代後期には、集落は東部と西部の 2 つの小集落に分かれ、そのまま古墳時代へとつながっていきます。かつての大きさはなく、防御のための環濠もなくなっています。

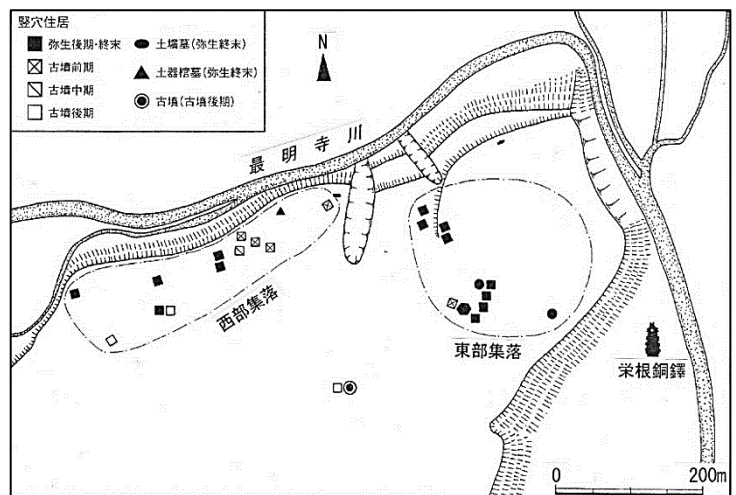


図 5 古墳時代の加茂遺跡

弥生時代後期には、復元の高さが 114 センチメートルもある巨大な栄根銅鐸が出土しています。これは銅鐸の中でも最末期のものですが、弥生時代の終わり頃に加茂の集落がこのような大きい銅鐸を持っていたということです。集落が小さくなった背景としては、近畿地方の中枢部である程度の統合政権ができたことで近隣地域間の争いがなくなってしまう、防御された集落で多くの人々がまとまって住む必要がなくなったことが考えられます。この巨大な銅鐸は、その時統合政権からこの地域に配布されたものだったのでしょう。

### ●古墳時代の栄根遺跡

図 6 は、昭和 58 年の JR 川西池田駅周辺の写真で、再開発工事中のものです。それ以前の福知山線は単線ディーゼルの時代でしたが、複線電化され川西池田駅も西側から東側に移ってきました。これはすでに新しい駅舎ができている状態です。それに合わせて川西能勢口の駅前再開発も行われましたが、栄根遺跡はこれらの工事に伴う発掘調査で明らかになってきました。この写真は、当時あったジャスコの屋上から撮ったものですが、右側に栄南団地が一部できあがっていて、その左が発掘調査現場、左奥の丘の上には加茂遺跡が見えます。





図 6 昭和 58 年当時の栄根遺跡周辺

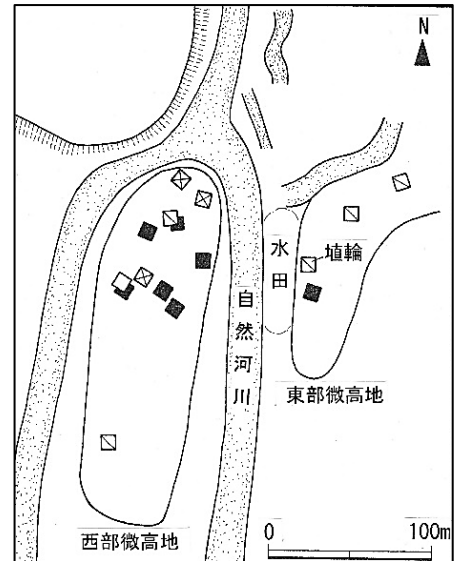


図 7 古墳時代の栄根遺跡

栄根遺跡は、台地の上の加茂遺跡と違って低地の遺跡です。図 7 のように西側と東側には周辺よりわずかに高くなった微高地があり、その上に弥生時代後期から古墳時代の集落が営まれていました。微高地間の低地には川が流れており、水田が開かれるという集落をとりまく環境も調査で明らかになっています。

川跡からは水を堰止めて水田に流すための堰の木杭が多数出てきました。図 8 のような水田跡も見つかっています。川の跡には現在も地中に水が残っていることから木製品が残っており、図 9 のような木舟や倉庫の扉と思われる木製の扉も出土しました。また石製刀子形模造品（せきせいとうすがたもぞうひん）や勾玉（まがたま）など祭りに使うものが出てきました。これらは、川西市文化財資料館に展示されています。

#### ●古墳時代の小戸遺跡

図 10 は小戸遺跡の集落の様子で、現在の川西市役所を建てる前の発掘調査でわかってきました。栄根遺跡と同じように弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居が、重なるような形で 17 軒見つかっています。このように、栄根・小戸遺跡は弥生時代中期には小集落でしたが、弥生時代後期から古墳時代にかけて集落が充実してくる様子がわかるようになります。



図 8 水田跡



図 9 木舟

### 3. 集落内の变化

#### ●円形から方形竪穴住居へ

以上がこの地域の古墳時代集落ですが、集落の中が弥生時代とどう変わってきたのかということをお話します。まずは竪穴住居の変化です。

弥生時代中期の竪穴住居というのは円形です。一部四角いものもありますが、ほとんどが円形です。それが弥生時代後期から四角い方形住居に変わってきて、古墳時代はすべて方形住居になります。

加茂遺跡では弥生時代の終末期に図 11 のような方形住居ができます。住居内の縁が一段高くなっていて、この部分を屋内高床部、通称ベッド状遺構と呼んでいます。竪穴住居には壁がなく、端の方は屋根が低いので、ここで寝ていたのではないかと思います。同じく加茂遺跡の終末期には多角形住居も出ています。一部しか出ていたのかわかりにくいのですが、五角形か六角形ではないかと思います。住居内の縁の床が少し高い屋内高床部がこの住居でも見られます。

栄根遺跡では、図 12 右のような四角いというよりも隅が少し丸い隅丸方形で屋内高床部のある住居が弥生時代終末期に出ています。古墳時代中期になると、栄根遺跡の住居(図 12 左)では屋内高床部はありません。屋内高床部は一時的なものであったと思われます。古墳時代後期になると、加茂遺跡で見つかった住居ではカマドが造られています。屋内で炊事をしていたようです(図 13)。

このように同じ竪穴住居でも、古墳時代になると四角くなったり、中の構造も変わったりしたことがわかります。平面だけではわかりませんが、外観も弥生時代とはかなり変わっていたのではないかと思います。

#### ●弥生土器から土師器・須恵器へ

土器の変化をみてみます。図 14 は、弥生土器(中期)と古墳時代の土器の比較図です。弥生時代中期には、壺や甕や高坏(たかつき)などがありますが、壺には文様が多く見られます。古墳時代になると、

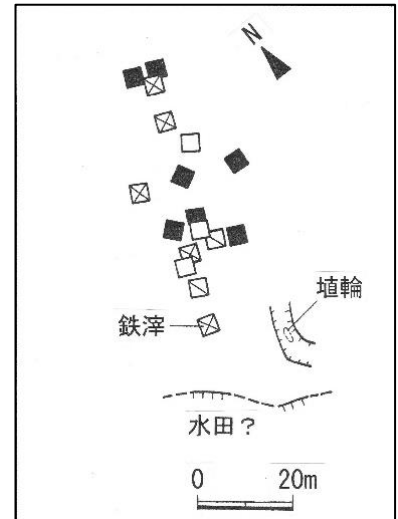


図 10 古墳時代の小戸遺跡



図 11 加茂遺跡の竪穴住居



図 12 栄根遺跡の竪穴住居



図 13 加茂遺跡のカマド付竪穴住居



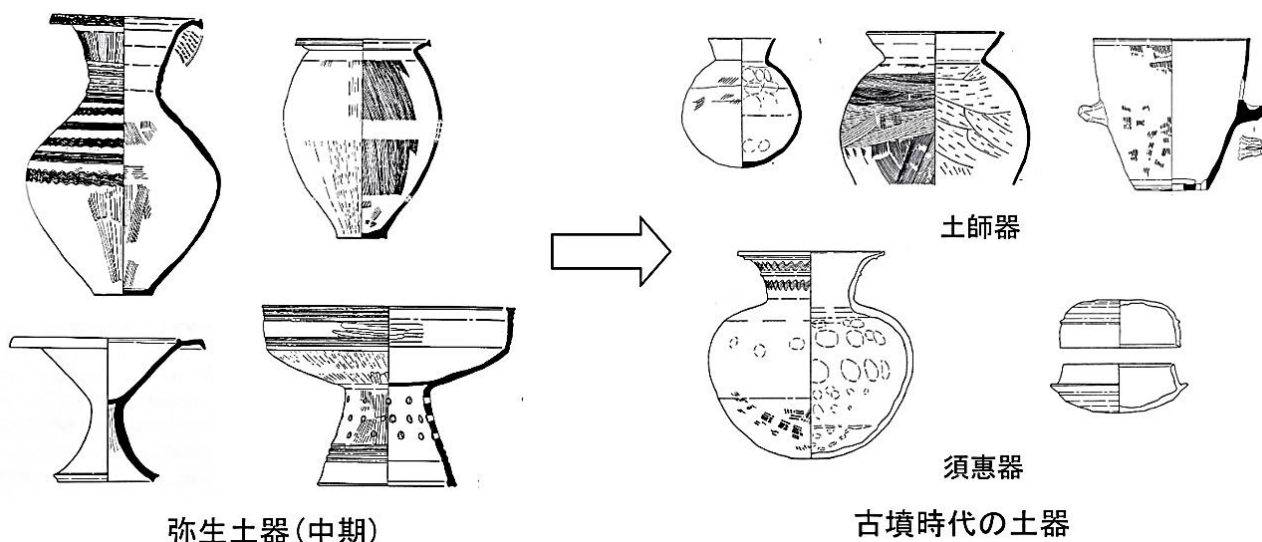


図 14 弥生土器から土師器・須恵器へ

弥生土器と同じ野焼きの土師器（はじき）や登り窯で焼いた須恵器（すえき）に変わっていきます。とくに土師器は弥生土器より厚さがかなり薄くなって、軽量化や炊事で火の通りがよいように発達したのでしょう。須恵器は朝鮮半島から伝わってきた新しい焼き物です。土師器・須恵器とも大量生産されたようで、形にあまり個性がなくなってきた、弥生土器に比べると少し面白みがなくなった感じがします。文化は進んだようですが、土器自体で見ると弥生時代の方が芸術的な美しさを感じられます。これが古墳時代の土器の変化です。

#### ●石器から鉄器へ

弥生時代中期までは石器が使われていました。加茂遺跡は、とくに石器がたくさん出土するということで有名ですが、石鏃（せきぞく）や石錐（せきすい）・石剣（せっけん）・石包丁（いしぼうちょう）などのいろいろな種類があります(図 15 左)。石剣は武器ですが、石鏃も狩猟以外に戦いで使っていました。古墳時代は鉄器の時代ですが、栄根遺跡では弥生時代終末期の鉄鏃(図 15 右)が出土しているように、弥生時代の終わりには鉄器に変わったとみられています。石器から鉄器への変化です。

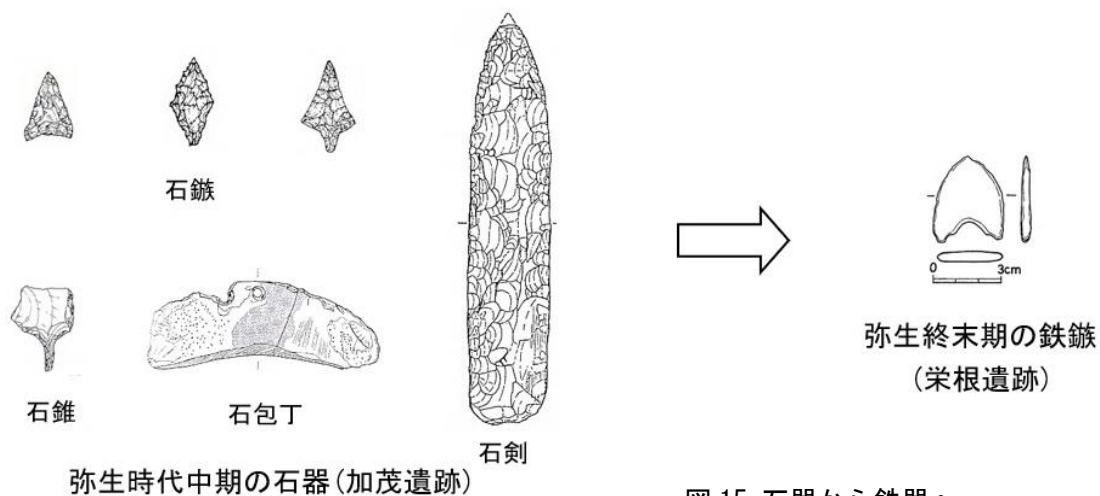


図 15 石器から鉄器へ

### ●鉄器造りと玉造り

古墳時代の集落では、稲作以外にもいろいろな物を造っていたようです。図 16 は、小戸遺跡の発掘時の写真です。竪穴住居跡ですが、使われなくなった後の住居がゴミ捨て場のようにになっています。そこを丁寧に発掘していくと、鉄の塊が見つかり、よく調べると鉄滓（てっさい）でした。直径約 20cm の穴を掘って下に粘土を敷いて炉を作り、火を点けた炭を置き、鉄をそこで熱します。そして、石の台の上でコンコンと叩いて鍛冶を行ったようです。図 17 がこの時見つかった鉄滓ですが、炉跡は見つかっていません。鉄滓は鉄くずのようなものがたくさん付着しており(図 17 左)、裏返すと(図 17 右)粘土が張り付いていて、裏の丸い部分が炉の底にあたるようです。農具か武器かは定かではありませんが、鉄器を造っていたということです。



図 16 鉄滓が出土した竪穴住居



図 17 鉄滓

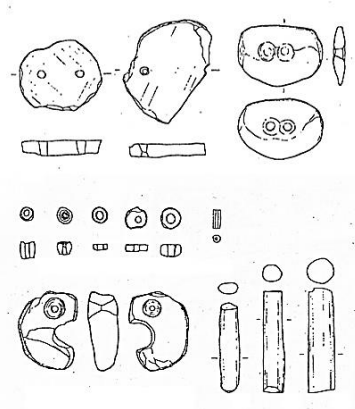
一方、加茂遺跡では滑石製模造品（かつせきせいもぞうひん）という、滑石で造った勾玉（まがたま）や管玉（くだたま）、有孔円盤（ゆうこうえんばん）などが出てきました（図 18 左）。玉・鏡などの模造品で、集落での祭りに使われたものでしょう。滑石ではなく、普通の勾玉や管玉、さらに玉砥石も出てきました(図 18 右)。玉砥石は、玉を造るときに形を整えるための砥石で、管玉をこの溝に当てて磨いて丸くしたようです。加茂遺跡では、玉造りを行っていたことがわかります。

## 4. 集落と古墳の関係

### ●埴輪の出土

古墳時代の集落を見てきましたが、古墳造りにどのように関わってきたのか、何か痕跡でもあるのでしょうか。

小戸遺跡では、古墳時代前期の埴輪（はにわ）が出土しました。溝を掘っていると上層のところで分厚い土器のようなものが出てきたので、洗って接合してみると、朝顔形円筒埴輪（あさがおがたえんとうはにわ）や円筒埴輪（えんとうはにわ）になりました（図 19 左）。小戸遺跡では集落のすぐ横に古墳があって、この溝は古墳の周濠かなと思ったのですが、溝の底まで掘ると弥生時代後期の完形の土器が出てきました。これで溝は古墳時代より前の弥生時代後期のものということになりますので、弥生時代後期の溝がほとんど埋まった



滑石製祭祀遺物



勾玉

管玉



玉砥石

図 18 玉の出土

時に埴輪が捨てられたということがわかったのです。

埴輪は古墳の墳丘の上に立てるものなのですが、このような出土のしかたから考えると、作った埴輪は古墳に立てる前に一旦集落内で保管されていたことがわかります。また、集落で保管していたものの古墳で使われず余ったものが捨てられたのか、あるいは使わないうちに潰れてしまったのかのいずれかが考えられます。

栄根遺跡でも竪穴住居を発掘していると、土器に混じって円筒埴輪(図 19 右)が出土しました。この場合は古墳時代中期で、5 世紀の後半あたりのものですが、やはり集落が古墳造りと関わっていたということがわかります。

問題は、これらの埴輪がどの古墳に使われようとしていたのかということです。この後から福永先生のお話がありますが、小戸遺跡の前期の埴輪について先ほどお伺いすると、前期古墳でも万籟山古墳から出土している埴輪とは形が違う。また、長尾山古墳や八州嶺古墳の埴輪とも違うということでした。すぐ近くの前期古墳はこの 3 基だけなのですが、もしかしたら未発見の前期古墳がもう 1 基あるのではないかということになります。

栄根遺跡で出土した中期の埴輪もどの古墳で使おうとしていたのかということですが、実はこの近くには中期古墳はありません。猪名川流域では、古墳時代中期にはこのあたりでは古墳が一旦なくなって、下流の方の豊中市の桜塚古墳群や尼崎・伊丹市の猪名野古墳群などでたくさん造られます。上流のこのあたりでは中期古墳は造られなかったということになっているのですが、栄根遺跡から出土した埴輪はやや小さいので、大きな古墳ではないにしても小型の中期古墳が今後見つかる可能性があります。

### ●加茂遺跡で見つかった古墳

小戸・栄根遺跡は埴輪の出土だけだったのですが、加茂遺跡では古墳そのものが平成 21 年の発掘調査で見つかりました(図 20)。先ほどみた加茂遺跡の東部集落と西部集落の中間の場所です。今この辺りに川西市文化財資料館があるのですが、そのすぐ南隣です。弥生時代の溝にしては大きな溝だと思って掘っていると、古墳時代の須恵器が出土して、古墳時代の溝だということがわかりました。この溝を追っていくと円形にめぐっています。実は、この西隣の土地では約 20 年も前の平成 3 年に発掘調査をしており、古墳時代の溝がみつかっていまし

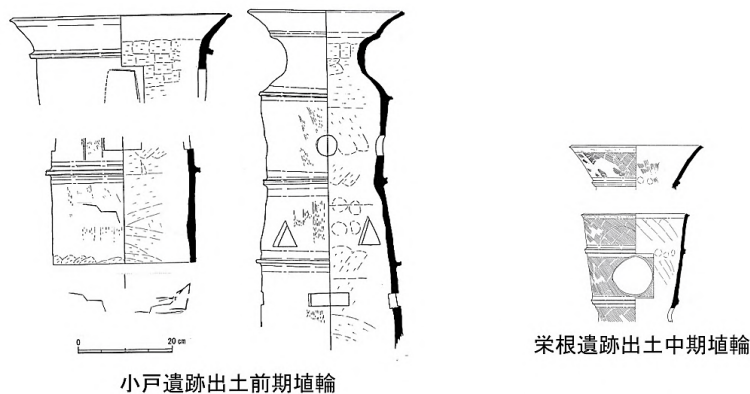


図 19 集落から出土した埴輪

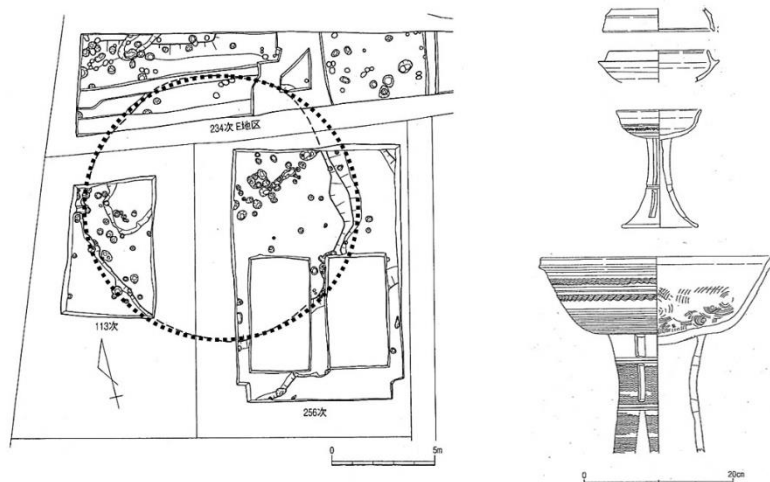


図 20 加茂遺跡で見つかった古墳と須恵器



た。また、1年前の平成20年には北隣の今道路になっているところですが、ここでも発掘調査を行うと丸くめぐる溝が見つかり、須恵器の器台や高坏などが出ていました。平成21年の調査時点で気が付き、これら3カ所の発掘成果を合わせてみると、周溝が円形にめぐる直径約13メートルの円墳というのがわかってきたのです。ただ古墳だとすると埋葬施設があるはずなのですが、見つかりません。出土した須恵器から見ると、古墳の時期は6世紀の前半から中頃のもので、勝福寺古墳の少し後となりますので、同じような横穴式石室があってもよいはずなのですが、横穴式石室を築いた痕跡はまったく見られません。おそらく木棺を直接埋葬した古墳で、後の時代の畑地造成で墳丘と埋葬施設が削られてしまったものと思われます。

長尾山丘陵の上に前期の3古墳や後期初めの勝福寺古墳など前方後円墳が築かれたといいましたが、これらはこの地域の集落をまとめて統括していた首長一人だけが山の上に大きな古墳を造ったものです。ところが、加茂遺跡で見つかった古墳をみると、古墳時代後期でも6世紀前半から中頃には、集落内のある程度の有力者も古墳を作れるような時代になったのではないかと思います。先ほど長尾山丘陵の上には6世紀の後半になると群集墳といって直径が10～20メートルぐらいの小さな古墳がたくさん造られるといいましたが、あの数の多さからみますと、これも同じように各集落のある程度の有力者達も古墳を造る時代になってきたことを示しています。群集墳は、現在でも6世紀後半に造られた雲雀丘古墳群C北1号墳・C北3号群などが残っています。C北1号墳は、生成幼稚園の門の横にあります。

## 5. 古代氏族を考える

### ●鴨神社とカモ氏

最後に古墳時代の古代氏族についてお話をします。どのような氏族が各集落に住んでいたのかということですが、現在加茂遺跡の中に鴨神社があります(図21)。参拝された方も多いと思いますが、この神社は平安時代の『延喜式(えんぎしき)』という書物に神社名が載っています。このような神社は延喜式内社(えんぎしきないしゃ)という各地方に古くからある神社で、鴨神社もその一つです。少なくとも平安時代、おそらくは奈良時代にさかのぼるとみられます。このことから、古代ここには「カモ氏」が住んでいたと考えられます。

弥生時代の加茂遺跡に「カモ族」がいたという話もよく聞きますが、これはまちがいで、2000年前の弥生時代にはまだ氏族名はありません。また、加茂遺跡の文化財ガイドで鴨神社もその一連で案内しますが、よく京都市にある上賀茂神社・下鴨神社との関係を聞かれたりします。いずれも延喜式内社であり、現在の鴨神社の祭神は「別雷(わけいかづち)神」で、京都市の上賀茂神社の祭神と同じです。ただし、奈



図21 鴨神社



図22 山城と大和のカモ神社・カモ氏

良県御所市にも鴨都波（かもつば）神社という延喜式内社があり、即断はできません。また、これらの神社を祭る古代氏族がいて、京都の「山城カモ氏」に対して奈良にも「大和葛城カモ氏」がいたとみられています。では、川西市の鴨神社やそこに居住したと考えられるカモ氏はどちらと関係あるのでしょうか(図 22)。

### ●全国に展開するカモ氏

平安時代の 9 世紀に書かれた『新撰姓氏録（しんせんしょうじろく）』という書物がありますが、中央の主な氏族の系譜が書かれていますので、古代氏族を研究する時によく使われます。平安時代に書かれたものなので、奈良時代やその前の古墳時代に適用できるのかというのはよく考えないとだめなのですが、カモ氏といってもいろいろな系譜があるようです。

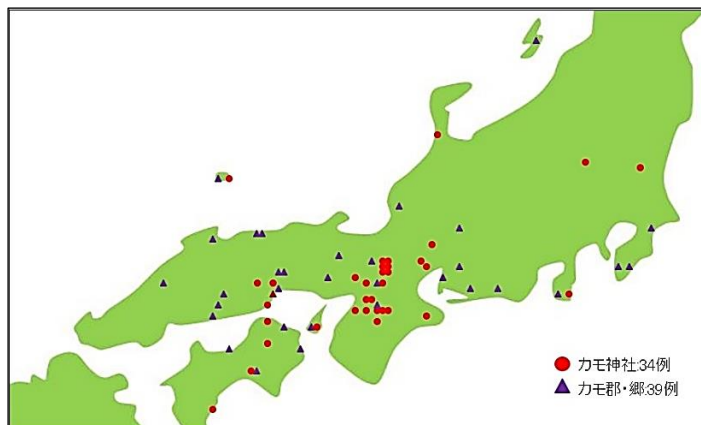


図 23 全国に展開するカモ

これによると、カモ氏は三系統あります。一つ目は、開花天皇の皇子の彦坐命（ひこいますのみこと）の後とされる皇孫系の鴨縣主（かものあがたぬし）・鴨君（かものきみ）。二つ目は、神魂命（かむたまのみこと）の孫武津之身命（たけつのみのみこと）の後とされる天津神系の賀茂縣主・鴨縣主で、これが山城の上賀茂・下鴨神社に関係するカモ氏です。三つ目は、大国主・大田田禰古（おおたたねこ）の後とされる国津神系の賀茂朝臣（かものあそん）・鴨部祝（かもべのほうり）です。賀茂朝臣は大和葛城の鴨都波神社に関係するカモ氏で、もとは鴨君といいました。これを見ると、同じカモ氏といっても全く先祖が異なる別氏族ということになりますが、このなかで川西の鴨神社やカモ氏に該当する有力候補は、三つ目の摂津国に居住した鴨部祝で、大和葛城の賀茂朝臣と同系であるとされています。

先ほど『延喜式』には全国の神社の名前が書かれているといいましたが、鴨神社というのは結構たくさんあります。「賀茂」、「賀毛」、「加毛」など漢字が違っているものもありますが、これらも合わせると 34 社にもなります。現在でいうと、東は茨城県、北は石川県、西は岡山県、南は高知県まで広がっています。また地名を見ても、平安時代の 10 世紀に書かれた『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）』とそれ以前の木簡資料も含めると、賀茂郡・賀茂郷（里）は、「鴨」・「加毛」などもあるのですが、39 例あります。これも現在でいうと、東は千葉県、北は佐渡、西は広島県、南は高知県と全国に広がっています(図 23)。

### ●中央氏族による地方支配

カモ神社やカモという地名が全国展開しており、まるで現代のチェーン店のようです。あくまでも平安時代の 9・10 世紀のことなのですが、これはそれ以前全国にカモ氏が展開していた名残ではないかと考えられるわけです。なぜこのようなことがおこるのか。実は古墳時代の後期、6・7 世紀の大和政権の支配体制を考えますと、中央政権が地方を直接支配するのではなく、部民制といって大和の有力諸氏族がそれぞれ地方支配す

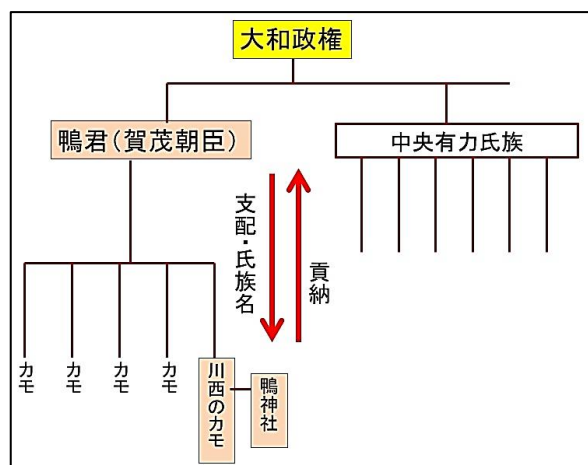


図 24 大和政権による支配体系

るという方式がとられていました。大和には物部氏や蘇我氏などの有力氏族がいましたが、それぞれが別々に支配するわけです。カモ氏の場合は、この時代にはおそらく大和の鴨君(賀茂朝臣)が主流となり、地方を支配する際に全国に同族のカモ氏を配置したとみられます(図 24)。そして、これらを支配していろいろなものを貢納させる。貢納は米・生産品・特産品などの物納や労役だったのでしょうか。加茂遺跡の場合は玉造がその一つであった可能性があります。ただし、同族の地方配置といっても、中央から移住させるではありません。地方の人々に同じ氏族名を名乗らせるのです。この結果、さきほど見たように全国にカモ神社やカモという地名ができたと考えられます。

それでは、支配を受けた人々はそれ以前どのような氏族名を名乗っていたのかという疑問がでてきますが、それまでは氏族名は無く、その時初めて氏族名を名乗り始めたのだと思います。大和でも氏族名ができたのは 5 世紀の終わり頃だといわれていますので、地方だと時期は下ります。古墳時代後期でも 6 世紀後半から群集墳が多く造られるということをいいました。この地域では、雲雀丘古墳群、雲雀山古墳群などですが、それらはこの地域の人々がいずれかの中央氏族の支配下となったことにより古墳を築くことが認められ、同時に氏族名が与えられたことになるのではないのでしょうか。加茂遺跡で見つかった直径約 13 メートルの古墳は、それより時期がやや早いのですが、加茂遺跡の集落が大和の鴨君の支配下となり、その同族としてカモ氏を名乗り始めた記念碑のようなものであったのかもしれない。

## ●おわりに

図 25 は加茂遺跡から北側の長尾山丘陵を眺めた写真です。今日お話しした長尾山古墳・万籟山古墳・八州嶺古墳などの前方後円墳や雲雀丘古墳群・雲雀山古墳群のほか平井古墳群などの群集墳を仰ぎ見ることができます。おそらく当時の人々も山の下集落から古墳を見上げていたのでしょう。昨年の講座では、近代の住宅開発や温泉開発で特色ある歴史や文化財が残っている地域ということでしたが、一方ではこのようにさらに古い時代の古墳がたくさんある街であるということを認識していただけたらと思います。



図 25 加茂遺跡から見た長尾山丘陵の古墳



## 講演2 「長尾山丘陵における前方後円墳の調査」

講演者 福永伸哉 大阪大学人文学研究科教授

大阪府と兵庫県の府県境に沿って流れる猪名川は、「西摂平野」とも呼ばれる大阪平野北西端の平野部を形成しています。この猪名川が平野部から北摂山地にかかる辺りは、西から長尾山丘陵、東から五月山の山塊が迫り、その狭い地峡の間を猪名川が縫うように南に流れていきます。

私たち大阪大学考古学研究室では、2000年から地元川西市と宝塚市の教育委員会と協力して、両市にまたがる長尾山丘陵で古墳の調査を行ってきました。この20年余りの間に得られた調査成果は従来の理解を大きく変えるもので、ヤマト政権の時代において、この地域が日本史上で重要な意味を持っていたことがわかってきました。

### 1. ヤマト政権成立過程の猪名川流域

弥生時代が終わり、各地に前方後円墳がつくられるようになる古墳時代（3世紀中頃～7世紀初め）はヤマト政権の時代です。この時代には東北部から九州南部までの日本列島の広い範囲で大きな政治統合が生まれました。いまの「日本国」の成り立ちの第一歩です。その政治統合の主導権を握った中心勢力がヤマト政権で、奈良盆地や大阪平野につくられた巨大な前方後円墳はその王の墓を含んでいると考えられます。

古墳時代は、前期（3世紀中頃～4世紀中頃）、中期（4世紀後半～5世紀）、後期（6世紀～7世紀初め）の3時期に区分的なことが一般的です。

さて、ヤマト政権成立前の弥生時代後期（1～2世紀）には北部九州、山陰、中部瀬戸内、近畿、東海などで地域政治連合が並び立っていました。それぞれの連合の有力者たちは独特の青銅器、墳墓、祭祀土器などを「地域シンボル」として、仲間同士であることを確認していました。近畿政治連合のシンボルは突線鈕式銅鐸と呼ばれる大型の銅鐸です(図1)。

じつは、突線鈕式銅鐸はこの会場からも近い満願寺の山中で江戸時代に出土しているのをはじめ、川

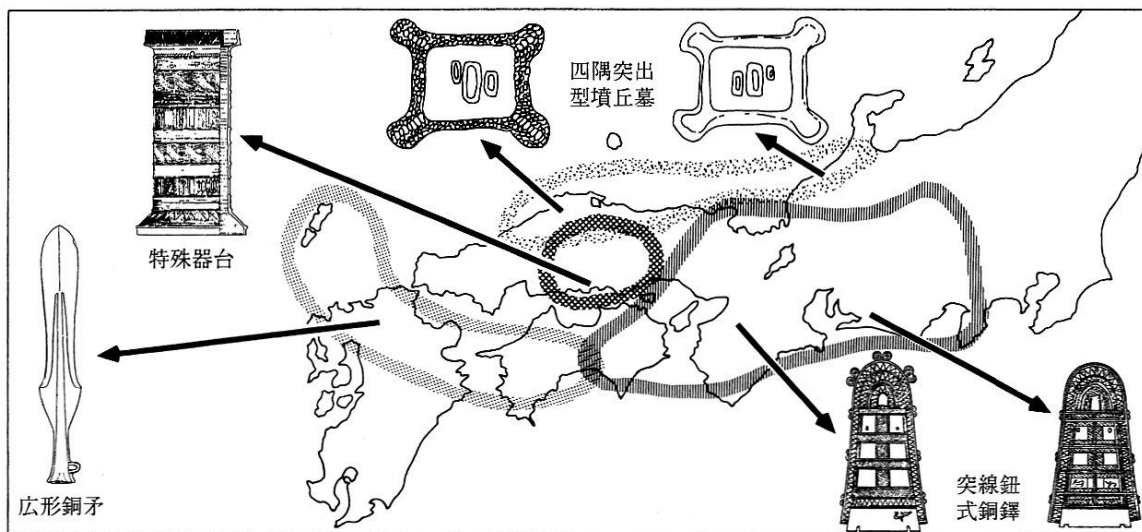


図1 弥生後期の地域政治連合

西市栄根遺跡、箕面市如意谷遺跡、豊中市利倉遺跡、同利倉南遺跡などでも出土しており、猪名川流域はその集中地の一つとなっています。つまり、すでに弥生後期の段階で、猪名川流域は近畿政治連合の中で「主流派」としての立場を保っていた可能性が高いわけです。

もうひとつ注目されるのは墳墓の形です。弥生後期から終末期にかけて、猪名川流域では円い形をした有力者の墳墓がさかんに築かれました。伊丹市口酒井遺跡、豊中市豊島北遺跡、同服部遺跡などが代表例です。弥生中期までは方形周溝墓と呼ばれる四角い形の墳墓が一般的だったのですが、後期になるとこの地域ではあらたに円形墳墓が採用されるようになります。円形墳墓はやがて墓前祭祀の場である「突出部」を発達させて前方後円墳へ発展していく系統の墓なので、早くから円形墳墓を採用した猪名川流域は、墓制においても前方後円墳へと向かう最先端の情報を手にしていたといえるでしょう。

こうした弥生後期の状況は、猪名川流域の勢力がヤマト政権にとっても重要な存在となっていく前史として踏まえておく必要があります。

## 2. 近年の猪名川流域における重要発見

### (1) 長尾山丘陵の前期古墳の集中

ヤマト政権の時代、言い換えれば古墳時代の歴史動向を探る大きな手がかりは、各地に築かれた有力豪族の古墳です。いつ、どこに、どんな特徴の古墳がつくられたかを整理していくことによって、その地域内や地域間の政治的な動きを探ることができます。

猪名川流域は、支流の最明寺川、箕面川、千里川などで画された地域に分けられ、それぞれの地域に有力古墳の築造が認められます。その有力古墳の推移について、この20年余りの調査成果を反映させた最新の情報が図2です。

これを見ると、長尾山丘陵、池田、待兼山丘陵、豊中台地の4地域の中で、古墳時代前期の有力古墳が長尾山丘陵地域にもっとも集中していることがわかります。このうち、宝塚市長尾山古墳は猪名川流域で最初に築かれた前方後円墳(図3)、宝塚市万籟山古墳は竪穴式石室を持つ前方後円墳、宝塚市八州嶺古墳は同時期の猪名川流域では最大級となる長さ78mの前方後円墳です。また、丘陵麓の川西市小戸遺跡では前期の円筒埴輪が多量に出土しており、まだ知られていない近隣の古墳に立てる埴輪を準備した遺跡の可能性があります。このように、古墳時代前期の長尾山丘陵地域では、円筒埴輪を持つ前方後円墳が数代にわたって継続的に築かれた点が大きな特徴です(図4)。

長尾山丘陵の前方後円墳に葬られた被葬者は、古墳時代前期の猪名川流域全体において盟主的な地位にあった有力豪族の長と考えられます。奈良盆地で発達する円筒埴輪をいち早く導入している点から見ても、初期ヤマト政権と強い連携関係にある豪族が長尾山丘陵の麓の平地部に居住していた見ることができるでしょう。

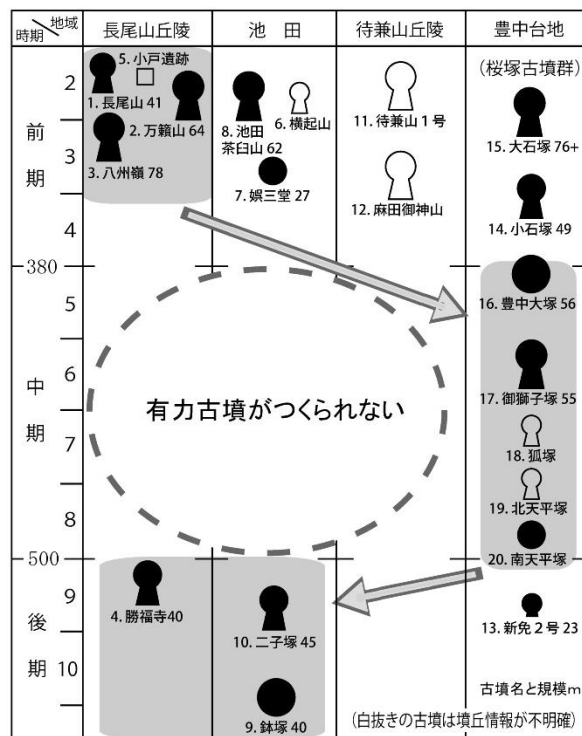


図2 猪名川流域の有力古墳の推移



図3 長尾山古墳の墳丘と埴輪列

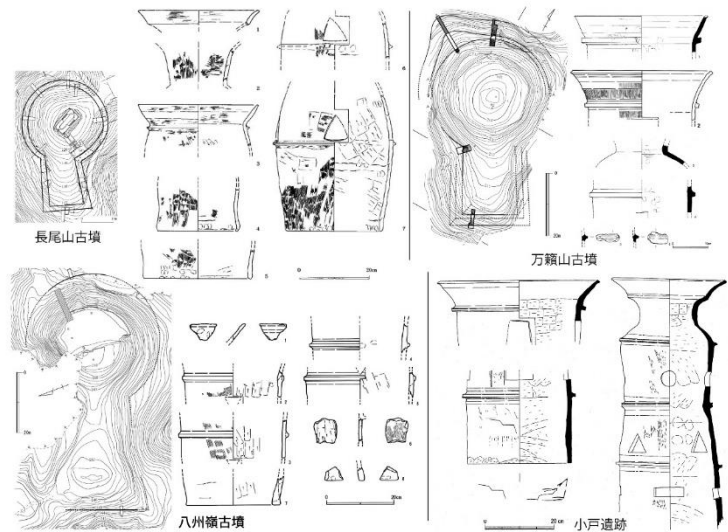


図4 長尾山丘陵の前期古墳と埴輪

20年ほど前までは、長尾山丘陵では確実な前期古墳としては万籟山古墳が知られるだけだったので、この地域の豪族が初期ヤマト政権の段階にこれほど力を持っていたと考えることはできませんでしたが、長尾山古墳、八州嶺古墳の調査によってあらたな理解が可能となったのです。

## (2)川西市西畦野下ノ段・井戸遺跡の発見

大阪平野の北西のはずれにある長尾山丘陵付近の勢力が初期ヤマト政権と太いパイプを持つことになった背景には、猪名川をさかのぼれば丹波山地を経て日本海側に抜けるという地理上の重要性があったのではないかと考えています。猪名川は長尾山丘陵と五月山山塊に挟まれた「地峡部」を過ぎると山地部に入り、一気に道も険しくなるような印象ですが、猪名川の上流部から三田盆地に抜けて北上すると、丹波市氷上町石生で日本で一番低い中央分水界（標高 95m）をこえて日本海側に出ることができます。

猪名川南北ルートを考える上で、2013年に能勢電鉄畦野駅の西方で見つかった川西市西畦野下ノ段・井戸遺跡の存在は重要です。一庫ダムに近い猪名川上流の地域で、まさにヤマト政権成立期にあたる弥生終末期～古墳初頭の集落跡が確認されたのです。しかも、遺跡からは小型の青銅鏡や鳥形土製品など、山間の小集落とは思えない遺物が出土していて、この集落の住人が広範囲の交流を行っていたことがわかります(図5)。

この遺跡はけっして奥まった袋小路ではなく、さらに北に抜けるルートの中継点の一つだったと見て良いでしょう。初期のヤマト政権にとっては、中国王朝



図5 西畦野下ノ段・井戸遺跡と銅鏡・鳥形土製品



との交渉を行ったり、鉄素材をはじめとした貴重な物資を手に入れたりするために、奈良盆地から大陸までの交通ルートを確認しておくことが重要でした。もちろん瀬戸内海がメインルートですが、日本海ルートも戦略的には確保しておく必要があります。

奈良盆地から外部に出るルートとしては、河内を通る南回りの大和川ルートと、摂津を通る北回りの淀川ルートがあります。古墳時代はじめの有力古墳の分布を見ると、初期ヤマト政権がより重視したのは淀川ルートだった可能性が高いといえます(図6)。淀川流域から日本海側に向かう経路としては、桂川をさかのぼって亀岡盆地からいまの山陰線沿いに綾部・福知山を抜けるルート、そしてもう一つが淀川下流域から猪名川流域に入って北上するルートが考えられます。

西畦野下ノ段・井戸遺跡の発見は、猪名川南北ルートがヤマト政権成立期に機能していたことを明らかにしました。長尾山丘陵の「猪名川地峡部」は、その北方への出入り口としての要衝にあたるわけです。

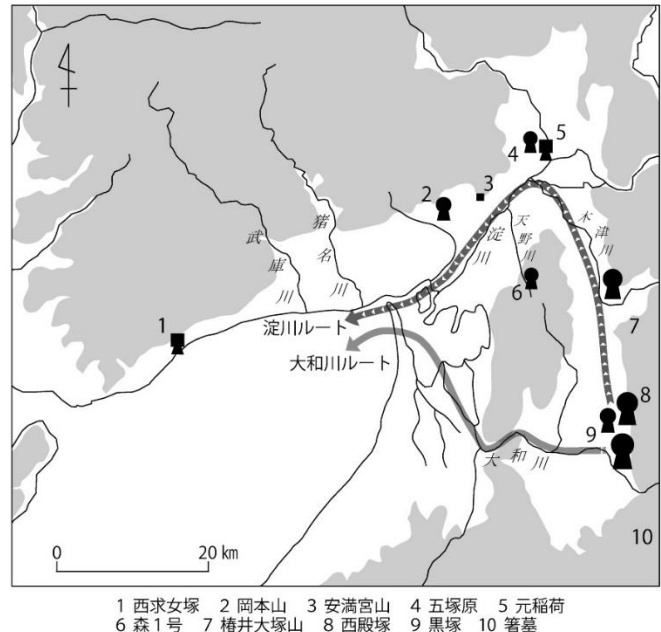


図6 有力初期古墳と畿内南北ルート

### (3)勝福寺古墳の新事実と継体大王

古墳時代前期に猪名川流域勢力の中で盟主的な地位を占めていた長尾山丘陵地域では、4世紀半ば過ぎの八州嶺古墳を最後に、約150年間にわたって有力古墳がつくられない期間が続きます。もちろん人は住み続けていたでしょうから、この現象は長尾山丘陵地域とヤマト政権との連携関係が弱くなったことを示しているといえるでしょう。ちなみにこの時期の猪名川流域では豊中台地につくられた豊中市桜塚古墳群が隆盛し、一人勝ちのような状況となります(図2)。

じつは、この古墳時代中期には王陵のつくられる場所も奈良盆地から大阪平野に移動します。ヤマト政権の主導権が大和勢力から河内勢力へと移ったと見る説が有力です。先年、世界文化遺産に登録された大阪府の百舌鳥・古市古墳群は、河内勢力が主導権を握ったこの段階の王陵群です。豊中台地の桜塚古墳群には多数の鉄製甲冑が副葬されており、それを与えたと推定される河内勢力との強い連携関係がうかがえます。

つまり、猪名川流域での長尾山丘陵勢力から豊中台地勢力への盟主権の交替は、ヤマト政権中枢の主導権が大和勢力から河内勢力へと交替する「政治変動」と連動した現象だったといえるわけです。中央政界の激変が地方にも波及するという現象は、むかしもいまも変わらないようです。

さて、5世紀末を境に、猪名川流域の盟主的地位にあった豊中台地の豪族の勢いにも急速な衰えが見られるようになり、古墳時代後期の6世紀になると有力古墳の築造が認められなくなります。この豊中台地勢力と入れ替わるようにふたたび台頭してくるのが、長尾山丘陵地域の勢力です。長尾山丘陵の東端

に6世紀初めに築造された川西市勝福寺古墳は、その状況をはっきりと物語る存在です。

勝福寺古墳は、私たちが調査を行う以前には、5世紀の円墳と6世紀の円墳とが隣り合っ­てつくられているという評価が一般的でした。しかし、調査の結果、これらは一つの前方後円墳で6世紀初めに築造されたこと、尾張の技術でつくられた円筒埴輪が立てられていたこと、最新式の埋葬施設である百済系の横穴式石室が後円部に2基築かれている(図7)ことなど、従来の情報を一新する新しい成果が得られました。



図7 勝福寺古墳の2基の石室

尾張系の埴輪や百済系の横穴式石室は、ちょうど6世紀初めにヤマト政権の主導権を握った継体大王とつながりの深い古墳に用いられていることがわかっています。継体大王のくわしい出自は謎ですが、越前、近江、尾張、摂津などの豪族の支援を得て、従来の河内勢力に替わってヤマト政権の大王となったと見る説が有力です。つまり、この段階でもヤマト政権内の主導権交替が生じており、それが猪名川流域でも豊中台地地域から長尾山丘陵地域へと盟主権が動く変化につながった、ということになります。百済の武寧王とよしみを通じる継体大王は百済との交渉を重視しました。これによってふたたび淀川流域から日本海側へとアクセスできる猪名川南北ルートの存在感が増し、その要衝に位置する豪族の墓として勝福寺古墳が登場したわけです。

### 3. 猪名川ルートの重要性

このように古墳時代の猪名川流域では、つねにヤマト政権中枢での政治変動に呼応する形で地域内の勢力交替が起こっていることが明らかになってきました。そうした中央の動向を敏感に反映する傾向が見られることは、この地域がヤマト政権にとって地政学的に重要な要衝だったことを示しています。突線鈕式銅鐸や円形墳墓の卓越状況から見て、すでに弥生後期の近畿政治連合の中で一定の存在感を持っていたことに加えて、大陸との交渉が大きな意味を持つ古墳時代になって、畿内の平野部と日本海側を結ぶ主要ルートの一つとして猪名川南北ルートの重みがいっそう増したことが推定されます。

なかでも、近年発掘調査が進んだ長尾山丘陵地域の豪族の盛衰からは、古墳時代史の動きをたいへん良く読み取ることができます。長尾山丘陵と五月山山塊に挟まれた「猪名川地峡部」は、過去も現在も南北に行き交う人々にとって要衝の地であり、それゆえに豊かな歴史情報がいまも眠っていることと思います。

#### 【挿図出典】

図1：筆者作成 弥生後期の地域政治連合

図2：筆者作成 猪名川流域の有力古墳の推移

図3：筆者撮影 長尾山古墳の墳丘と埴輪列

図4：長尾山丘陵の前期古墳と埴輪 次の文献より筆者作成。大阪大学文学研究科 2015『21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』、同 2019『日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開』、同 2022『畿内の地域間関係の解明に基づくヤマト政権成立史の新理解』、岡野慶隆 2012「古墳時代の最明寺川流

域』『菟原Ⅱ 森岡秀人さん還暦記念論文集』菟原刊行会

図5：西畦野下ノ段・井戸遺跡と銅鏡・鳥形土製品（兵庫県教育委員会の現地説明会で筆者撮影）

図6：筆者作成 有力初期古墳と畿内南北ルート

図7：筆者撮影 勝福寺古墳の2基の石室

---

## 講 師 紹 介

### 岡野慶隆（おかの よしたか） 郷土史研究家

1952年 兵庫県生まれ

関西学院大学大学院文学研究科修士課程修了

川西市教育委員会文化財担当として加茂遺跡・栄根遺跡・満願寺等の発掘調査を行う。

退職後、川西市高齢者大学りんどう学園、市内公民館郷土史講座等の講師を務める。

主要著書等

「長尾山丘陵における横穴式石室—その企画法と構築技法—」市史研究紀要たからづか第6号 1989年

『『喪葬令』三位以上・別祖氏上墓の再検討』古代文化 51-12号 1999年

「日本の遺跡8 加茂遺跡」同成社 2006年



### 福永伸哉（ふくなが しんや） 大阪大学人文学研究科教授

1959年 広島県生まれ

大阪大学文学部史学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士。

大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、2005年より現職。

国や地方自治体の文化財関係の委員も務める。

主な研究テーマ：三角縁神獣鏡、前方後円墳などに関するもので、弥生時代・古墳時

代の歴史を、中国や朝鮮半島を含めた東アジアの歴史動向の中で再構築することを目指す。

主要著書等

『シンポジウム三角縁神獣鏡』（編著・学生社）、『邪馬台国から大和政権へ』（大阪大学出版会）など。



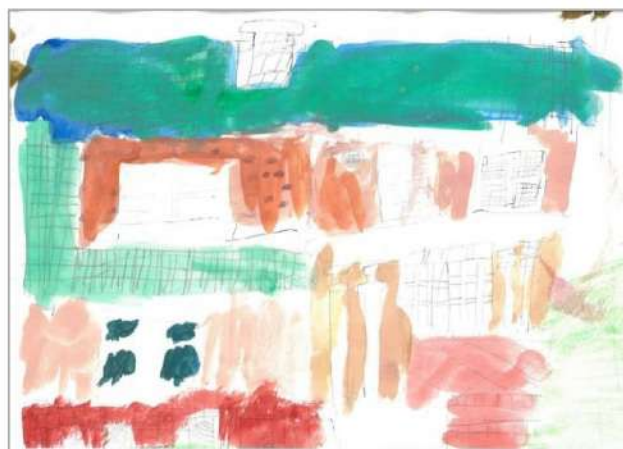


## 付 録 I

“わがまちのお気に入りポイント”スケッチ展 出展作品



「まちの絵」



「高碕記念館」



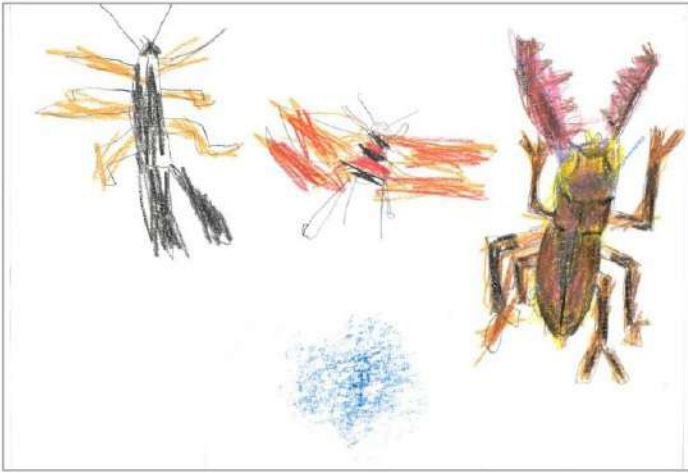
「長尾台一丁目」



「高碕記念館」



「雲雀丘山手公園」



「昆虫たち」



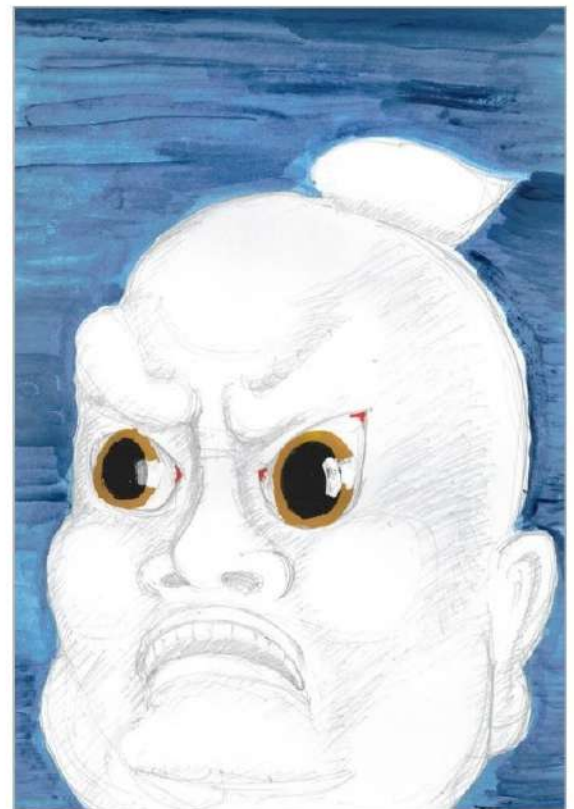
「静物」



「つつじが丘の景色」



「万年坂の地藏石仏」



「満願寺山門の仁王像」



## 付 録 II

“わがまちのお気に入りポイント”フォトコンテスト 入選作品

応募者 16 名、応募作品数合計 56 点

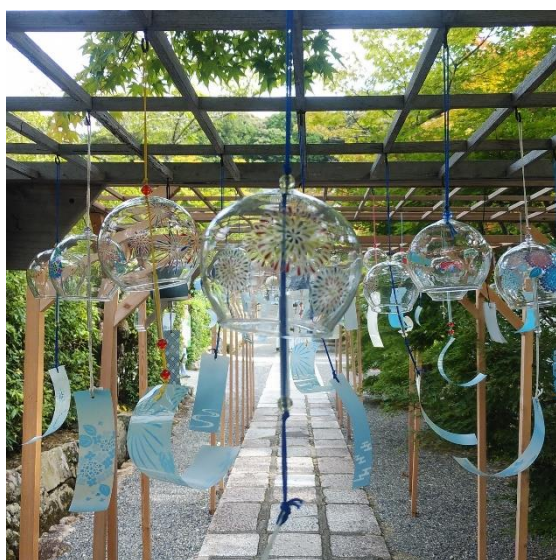
(小学生以下の部 1 点 中高生の部 1 点 一般の部 54 点)



グランプリ  
「桜の咲くころ」  
撮影 soramilk



優秀作品賞  
「夢のようなお家」  
撮影 usagi



優秀作品賞  
「満願寺の粋な参道・8月」  
撮影 yukikomamadayo



優秀作品賞  
「クロスジギンヤンマの飛翔」  
撮影 イージーライター



### ～ 編集後記 ～

古墳といえば、仁徳天皇陵古墳、応神古墳のような巨大古墳が有名ですが、実は我々が住んでいる地域にも、様々な古墳が存在したということに非常に興味を持ちました。

今回、興味深いお話を両先生から伺いました。‘この地域に何故多くの古墳が築かれたのか？’という疑問が、少し解消しました。古代人が如何に集落を造り、暮らしていたかと思う古代へのロマンを大いに掻き立てられました。ご講演を快諾いただいた岡野先生、福永先生に心から感謝いたします。

スケッチ展・フォトコンテストでは、素敵な作品を多数出展していただきました。特にフォトコンテストは応募作品が多く、紙面の関係で入賞作品のみの掲載となりました。作品は当協議会のホームページにアップしていますので、ご覧ください。

作品募集に先立ち、子ども達を対象のワークショップをボランティアのご協力で開催いたしました。ご協力をいただいた皆様に改めて感謝いたします。

これらの活動を通して、わがまちの素晴らしさを再発見し、愛着を更に深め、より良いまちづくりの進展に寄与することを願います。

宝塚市長尾台小学校区まちづくり協議会  
(コミュニティひばり)

発行日 令和5年(2023年)3月

発行者 宝塚市長尾台小学校区まちづくり協議会  
(愛称：コミュニティひばり)

歴史講演会実行委員会

本紙は、令和4年度宝塚市きずなづくり推進事業の補助金により制作いたしました。